

世界ユーモア  
文学全集  
4



マリナー氏ご紹介／ウッドハウス  
井上一夫訳  
マルタン君物語／エイメ

井上一夫訳

マルタン君物語

エイメ

江口 清訳

世界ユーモア文学全集

第4巻

筑摩書房版



世界ユーモア文学全集 第4巻

---

昭和36年3月5日発行

¥290

訳者 井上 一夫  
江口 清  
発行者 古田 晁

株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8  
振替東京165768 TEL(291)7651(代)

---

凸版印刷・藤田製本

# 目次

## マリナー氏ご紹介

P・G・ウッドハウス  
井上一夫訳 3

ウィリアムの話……………5

厳格主義者の肖像……………23

名探偵マリナー……………42

ある写真屋のロマンス……………62

スーフの中のストリキニーネ……………81

忍冬が宿……………102

ささやかな人生……………131

## マルタン君物語

マルセル・エイメ  
江口清訳 149

小説家のマルタン……………151

|            |     |
|------------|-----|
| おれは、くびになった | 183 |
| 生徒のマルタン    | 197 |
| 死んでいる時間    | 214 |
| 女房を寝とられた男  | 231 |
| マルタンの魂     | 244 |
| エヴァンジェル通り  | 258 |
| クリスマスの話    | 276 |
| 銅像         | 287 |
| あとがき       | 305 |

# マリナー氏ご紹介

P・G・ウッドハウス

井上一夫訳



MEET MR. MULLINER

P. G. Wodehouse

絵 小 林 泰 彦

## ウィリアムの話

有能にしてよく気のつくわれらが女給仕ボッスルスウェイト嬢が、声をひそめてわれわれに、向うの隅の紳士はアメリカ人だといった。

「アメリカから来てるのよ」ボッスルスウェイト嬢は、意味をより明らかにするためにつけ加える。

「アメリカから？」一同は聞きかえした。

「アメリカからよ。あの人はアメリカ人」ボッスルスウェイト嬢はだめを押す。

マリナー氏が旧世界の礼節を代表して立ち上った。釣魚亭酒場には、アメリカ人はそうちよくちよくは現われない。現われたときには、われわれは彼らを歓迎する。大西洋を結ぶかけ橋という言葉が、空念仏でないことを彼らに理解させるのだ。

「今晚は」と、マリナー氏は声をかけた。「どうです、ちょっと気晴らしに、私たちとごいっしょしませんか？」

「それはどうも、ご親切に」

「ボッスルスウェイト嬢と、このいつもの常連ですよ。

あなたは、地球の向う側からこられたようですが、イギリスのこの片田舎で、おもしろいことがありますか？」

「いいですねえ。もっとも、こういっては何ですが、やはり私の国の風景とは比較にはなりませんかね」

「お国はどちら？」

「カリフォルニアです」アメリカ人は脱帽して答えた。「合衆国の宝カリフォルニアです。瑠璃色の海、壮大な山脈、

とこしえに輝く陽光、かぐわしい花。カリフォルニアに及ぶところはありませぬ。住人はたくましい男と女らしい女で……」

「しかし、カリフォルニアも、地震さえなければいいんだが」マリナー氏が水をきした。

われらが客は、毒蛇にでも咬まれたみたいにとび上った。

「カリフォルニアに地震なんて、聞いたことはありません

よ」耳ざわりな声で抗議する。

「一九〇六年のやつは？」

「あれは地震じゃない。火事です」

「いや、地震だとばかり思ってたがなあ」マリナー氏はいった。「私の叔父のウィリアムが、ちょうどそのころ向うへいっていて、よく聞かされたもんですよ。わしが花嫁を手にいれたのは、サン・フランシスコの大地震のおかげだ」とね」

「大地震なんてはずはない。火事ならあったかもしれないが」

「まあ、それじゃその話を聞かせましょう。あんたが判断すればいいんだから」

「サン・フランシスコの大火の話なら、喜んでうかがいましょう」カリフォルニア子はいんぎんにいった。

叔父のウィリアムは——と、マリナー氏は話しはじめた——そのころ、東洋から帰ったところだった。マリナー家の資産というのは、昔から手広く散っていてね。叔父はちよと自分が相当な株を握っているある茶の貿易会社を視

察に、支那へいって帰ってきたところだったんだ。サン・フランシスコで船をおりて、大陸は汽車で横断するつもりだった。とくに、アリゾナのグランド・キャニオンを見物したかったんだね。それにマートル・バンクス嬢が長年同じ願いを抱いていたと知ったとき、叔父にとっては彼女が、すぐに自分が身も心も捧げていいと決意するほど、うまの合った女性であるはつきりしたるしに思えたんだね。

このバンクス嬢というのは、香港ホンコンからの船の相客でね。ウィリアム・マリナーは、日ましに深く彼女を恋慕うようになつた。だから、船路の果ての金門湾にはいるところで、彼は求婚したんだ。

叔父がどういふ言葉で求婚したか、正確なところは聞いてないが、ベネチア弁舌さわやかにやったことは間違いないね。マリナー家の人間はみんな能弁だし、場合が場合だから、もちろん彼も精いっぱい弁舌をふるったことだろう。やつとその演説がおわつたとき、彼女の態度は叔父の目には、脈がありそうだとはつきり見えた。彼女は手すりごしに、眼下の海を恍惚トランスとして見いていたという。やがて、彼女

がふりかえっていったんだ。

「マリナーさん、いまのお話をうかがって、とても嬉しいし、名譽なことで存じますわ」諸君にもおぼえがあるだろうが、女がそういう口のきき方をした当時は、こんなこともあったんだ。「あなたはこの私に、殿方とちがたが女にあたえてくださる最大のお言葉をくださいました。でも……」

ウィリアム・マリナーの心臓は、ぎょつと止ってしまつた。この「でも……」というのが気にいらぬ。

「ほかにも誰か？」彼はつぶやいた。

「それが、ええ、いるんです。フランクリンさんにも、今朝求婚されて、考えておきますとお答えしたんです」

沈黙。あの無作法者のフランクリンが、こんなことをするのではないかと、ずっと心配はしていたのだがと、ウィリアムは肚はらのなかでつぶやいていた。デズモンド・フランクリンが、危険な恋仇こいにくになりそうだということは、わかつていたような気がする。例のやせて鋭くて、鷹たかみたいな顔のある顔、東洋人の間ではエンバイヤ・ビルみたいに目立って見える男だ。デッキに立って、ひげを噛みながら遠くを見るような目つきをしてるかと思うと、女の子に何を考

えているのだと聞かれると、ちょっと短いため息をついてみせて、ぼんやりしていて失礼、こういう落日を見るといつでも、素手すでで四人の海賊を殺して、親しいタッピー・スミザース老人を危いところで助けたときのことを思い出すなどというのだ。

「フランクリンさんには、とても魅力がありますわ」マートル・パンクスはいうのだった。「私たち女って、ああいうことのできる殿方を尊敬しますわ。ボーイ・スカウトのちっちゃなナイフで、鯨さめを三匹も殺したなんて殿方には、女は敬意をはらわずにはいられませんわ」

「そんなのは、話だけですよ」ウィリアムもだまっていなかった。

「でも、そのちっちゃなナイフを見せてください、ましたわ」女は齒牙しがにもかけずにいう。「それに、たった一発でライオンを二匹も仕とめたこともあるんですって」

ウィリアム・マリナーの心は重かったが、彼はなおもくいさがった。

「あの男がそういうことをやりとげたってことは、たしかに考えることですよ。しかし、結婚なんてものは、それ

だけのものじゃない。ぼくだったら、もしぼくが女だったら、人柄がある程度堅実で安定したほうを求めますね。例をあげていえば、あんたは船内の運動会の卵とスプーン競走で、ぼくが勝ったのを見たでしょ？ 一種の人生の縮図とでも呼んでいいでしょうが、あれで結婚した男性に必要なあらゆる素質——強い冷静さ、鉄の意志、静かで気どらない勇気などというものが、よく現われていたと思えるんですがね。一定のルールのもとに、卵を小さなスプーンにのせて、デッキをいまわり半できるという男は、信頼できる男ですよ」

彼女はちょっと迷ったようだったが、それも一瞬のことだった。

「考えなければ。私、考えなければなりませんわ」

「そうですね。上陸したら、ホテルで少しは会っていただけですか？」

「もちろん。それにもし——つまり、どんなことになって、あなたにはいつまでも親しい親友としてつきあっていただきたいと思いますわ」

「こちらこそ」ウィリアム・マリナーもいった。

ウィリアム叔父のサン・フランシスコでの三日間は、叔父とバンクス嬢の同じホテルにデズモンド・フランクリンも泊っていたということを割り引きしても、思ったとおり、かなり楽しいものだった。娘の気持ちをも自分のほうに、かなり満足できる程度まで、うまく引きよせたし、いっしょに金門公園へいったり、海岸の水族館であざらしが岩の上で日なたぼっこをするのを見たりして、楽しい何時間かを送ったのだった。しかし、三日目の晩に、打撃がくだった。

「マリナーさん、お話があるんですけど」マートル・バンクスがいう。

「何でもうかがいますよ」ウィリアムはやさしくいった。

「あの向う見ずのフランクリンと結婚するなんて話でなければね」

「でも、お話というのはそのことですわ。それに、あの方を向う見ずだなんていわないで。とても勇気があって豪胆な人だからですわ」

「その軽はずみな決心は、いつついたんです？」ウィリアムは問ぬけな顔をしてたずねた。

「まだ、一時間とたつてませんわ。庭でお話ししてたんですけど、何となく話が尻のことになつたんです。あの人は前にアフリカで、尻に追われて木に登り、血に飢えた尻の目に胡椒をふりかけて逃げた話をしてくれましたわ。尻がきたとき、運よくお昼を食べていたし、固ゆで卵と胡椒のピンを手にしていたんですって。デスデモナではないけど、この話を聞いて、あの方のくぐりぬけてきた危険のため、あの方が愛しくなりましたわ。向うは、私がそんな気持ちをもつてるところが好きになつたんです。お式は六月にします」

ウィリアム・マリナーは、だしぬけにこみ上げてくる激しい嫉妬の思いに、歯噛みした。

「ぼくにいわせれば、いま聞いた話からしても、このフランクリンという男が、ひどく怪しげな男に見えてくると思いますかね。いや、悪党だといつてもいいくらいだ。自分からひけらかしてるんだが、一番主な個性というのが、動物にたいして残忍なことらしい。あいつは、鯨だろうが犀だろうが、あるいはそのほかのいえぬ人類の友だろうが、出あったら最後、すぐに体に傷をあたえて追っぱらわ

ずにはいられないんだ。ぶしつけなことは、ぼくはいいたくないんだが、これだけはいわずにはいられない。あんたがたの結婚がもう少しうまくいったとしても、あんたの子供はおそらく、猫を蹴とばしたり、犬の尻尾に空きカンを結びつけるような子供になりますよ。ぼくの忠告を聞いて、あの男に、気の毒だが気持ちが変つたと簡単な手紙を書いてやるんですね」

娘はきっぱりした態度で、腰を上げた。

「マリナーさん、あなたにご忠告をお願いしたおぼえはありませんわ」と、冷やかにいう。「それに、私、気持ちが変つてもいません」

すぐにウィリアム・マリナーは、すっかり前言をとり消してあやまった。男の恋の過程には、恋する相手に目を三角にしてにらまれると、まるでまりのようにちぢみ上つてしまふような気がして、めえめえとかすかな泣きごとをつぶやくだけになつてしまふ段階というものがあるものだ。わがウィリアム叔父も、この段階に到達したのだった。ホテルのロビーをつんけんして歩いてゆく彼女のあとを、とりとめもないいわび言をつぶやきながら、くつついてまわつ

たのだ。しかし、マートル・バンクスはつれなかった。

「帰って、マリナーさん」彼女は通りに面した回転ドアを指さしていった。「あなたは、自分よりすぐれた人間の悪口をいったわ。もうあなたとは、おつきあいたくありません。出てって！」

ウィリアムは、いわれたとおりに出ていった。あまりにも気が転倒していたので、回転ドアにぶつかると、そのままくると十一回以上まわってしまった。やっと玄関のボーターが、助けだしにくる。

「この廻転機械から、もっと早く出してあげようと思ったんですが……」彼を無事に通りにつれ出すと、ボーターはうやうやしくいった。「あそこにいる相棒と、十回以上まわるかどうか賭けたもんでして。あとでこたごたが起らないように、十一回目がまわりおわるまで待ったんです」

ウィリアムはぼんやりとその男をながめた。

「玄関のボーターか」

「さようで、何か？」

「教えてくれ。もし、ただ一人の惚れた女が逃げてしまつて、ほかの男と婚約したとしたら、君だったらどうす

る？」

玄関ボーターは考えた。

「こういうこつてしょうが」ボーターはいった。「つまり、旦那のお話というのは、いつもあたしには、堅いかあちゃんだと思えてたうちのジェーンが、もしあたしに古帽子をつきつけて、自分にはいい人ができたからお前さんはどこへでも行っちゃまいなといったとしたら、あたしがどうするかってんでしよう？」

「そのとおり」

「その質問なら、答は簡単でさあ」ボーターはいった。「角をまわって、マイクの店で、結構なやつをきゅーっとひっかけますね」

「ひっかける？」

「そうですよ。結構なやつを、きゅーっとね」

「どこでだって？」

「マイクの店ですよ。その角を曲ったところで、すぐわかりまさあ」

ウィリアムは礼をいって、歩きだした。その男の言葉から、新らしい、いろいろな意味でおもしろい一連の考えが

浮んでくるのだった。一杯やるか？ しかも、結構な強いやつをきゅーっと？ やってみれば、何かになるかもしれない。

ウィリアム・マリナーは、生れてこの方、アルコールッ気は味わたることがないのだった。いまは亡き母上に、二十一だか四十一だかになるまでは、酒は一滴も飲まないと約束したのだが、この年の点では、どっちだか忘れてしまったのだった。いま彼は二十九だったが、どっちの年だか間違いがあってはいけないと思って、大事をとって、いまだに禁酒を守っているのだった。しかしいま、ぼんやりと通りを角のほうに歩きながら、事情が事情なのだから、ちよっとぐらい無茶（むちゃ）をしても、亡き母者は怒りもしまいと思えるのだった。さっと一、二杯ひっかけてはいけますまいかと、天なる母者にたずねるように、彼は目を天に向けた。どこか遠くで、かすかにささやくような声で、「お行き！」というのが聞えるような気がしたから妙である。この瞬間、気がついてみると、自分は煌々（きらきら）と明りのついた酒場の前に立っているのだった。

ちよっと彼はためらった。そのうちに、傷心のおびただ

しい苦悩のとげが、すぐに救いを求めねばならぬことを思い起させたので、彼はスイング・ドアを押しあけて、なかにはいった。

陽気に明るく輝くその部屋で、まず目についたのは長いカウンターだった。そこには何人かの市民が、めいめい肘（ひじ）を木の台につき、下にとおっているしゃれた真鍮（しんちゆう）のレールに片足をかけてよりかかっている。カウンターの向う側には、ウィリアムがこれまでお目にかかったこともないような、世にも情け深くて人のよきそうな人物の上半身が現われていた。ひげをきれいに剃（そ）った大きな顔で、白い上衣を着、近づいてゆくウィリアムに、うやうやしい喜びといったような目を向ける。

「マイクの店って、ここ？」ウィリアムがたずねた。

「そうですよ」白い上衣の男が答える。

「君がマイク？」

「いえ。しかし、あたしが代りをつとめて、いっさいの切りもりをまかされてます。何なりどうぞ」

男の態度はどこから見ても、太っ腹（はは）な兄さんという感じだったので、ウィリアムも遠慮なく打ちあけ話ができるよ

うな気がした。カウンターに片肘ついて、片足をレールにのけると、彼は泣き声をまぜながら話しはじめた。

「ただ一人の恋人がそむいてしまって、他の男と婚約しちまったら、あなたの考えでは、どうしたらいい？」

紳士的なバーテンは、しばらく首をかしげていたが、やっと答えた。

「そうすねえ。わかってもらえると思いますが、これはあたしの本当の個人的な考えで、旦那がそのとおりにしなくても、あたしとしては別に何もいうとこないんですが、あたしの考えは——何としてでも、“ダイナマイトのしずく”を飲んでみるってこってすね」

同情するように、まわりに群がってきた客の一人が、首をふった。黒い目をした感じのいい男で、先週の木曜以来ひげを当てていないという風態だった。

「この人には『夢の国スペシャル』のほうがいいとききそうだぜ」

もう一人の、セーターを着て布の帽子をかぶった男も、また別な意見をもっているようだった。

「いや、『葬儀屋の喜び』にはかなわねえよ」

みんなが、あまりにも自分の利益を離れて親身に考えてくれているらしいし、また、みんながとても楽しそうなので、ウィリアムはそのなかのどれを選ぶか、心をきめかねていた。そこで彼は、えこひいきしないという外交手腕でこの問題を解決し、名前をあげられた飲料を三つとも注文した。

効能はてき面だった。最初のグラスを飲みほすと、思いもよらなかつた、たいまつ行列が、喉をねり下って胃の腑の凹みで爆発したのである。二杯目のグラスは、溶けた溶岩のようにちよつと重すぎる感じだったが、口当りはいたってよかった。そいつは、たいまつ行列に奇妙な力と甘い調べのプラス・バンドをそえるようなものだった。三杯目では、誰かが頭のなかの花火に火をつけはじめたような感じになった。

ウィリアムはいい気持ちになってきた。精神だけでなく、肉体的にもごきげんになってきた。自分がいまわり大きな立派な人間になったような気がして、マートル・パンクスを失ったことなど、パツとその重大さが消えてしまったような気がしてくる。黒い目の男にいったように、マー

トル・パンクスだけが女じゃないってことになった。

「さあ、こんどは何をすすめてくれる？」三杯目のグラスをさかさにあおると、彼はセーターを着た男にたずねた。

相手の男は、思いいれよろしく横っ面に人差指を一本当てる考えた。

「そうだ、こういう例がある。うちの兄貴のエルマーが女の子にふられたとき、兄貴はライ・ウィスキーをストレートで飲んだ。そうですよ。兄貴が飲んだのはそうだ——ライのストレートだ。女にふられたから、ライをストレートで飲む」といってた。たしかにそうだった。そう、ストレートのライですよ」

「ところで、そのエルマーという兄さんは、あんたが考えても模範とするにたる人物ですか？」ウィリアムは心配そうにたずねた。「信用できる人物でした？」

「あの兄貴は、イリノイ州の南部では最大の家鴨園をもつてた」

「ようし、きまった」ウィリアムはいった。「イリノイ州の半分をもつてゐるような家鴨に効くなら、ぼくにも効くだらう。たのむよ」彼は紳士風のバーテンにいった。「この

紳士方にも何をあがるかうかがって、おつきしてくれ。ぼくのおごりだ」

バーテンはいわれるとおりにした。ウィリアムはその奇妙な液体が、自分の氣にいるかいらないか味見するだけで、一、二バイント片づけてしまい、氣にいったというので、さらにおかわりを注文した。彼はそれから、新らしくできたこの友人たちの間を歩きはじめ、こつちで肩を叩くかと思つと、あつちでは愛情をこめて背中をどやし、三人目には苗字みょうじでなくて名前を教えろといいだすしまつ。

声がよくとおるように、カウンターのの上によじのぼると、彼はいった。

「君たちみんなに、いっしょにイギリスにきて暮してもらいたいよ。こんなに面おもつきの氣にいった連中にあつたのは、生れてはじめてだ。何だか君たちは、他人というより兄弟以上の氣がするよ。だから、手まわりのものだけまゐめて、いっしょに來たまえ。ささやかなわが家に落ちついて、いられるだけ遊んでくれ。とくにお前はそうだが、このわが親愛なるおいほれめ」ウィリアムはセーターの男に、笑顔でそうつけ加えた。

「ありがとよ」セーター男はいのつた。

「何ていった？」ウィリアムが聞きかえす。

「ありがとうといったのさ」

ウィリアムは、ゆつくりと上衣を脱ぐと、シャツの袖をまくりあげた。

「諸君、紳士として証人になってくれ」彼は静かにいった。「ぼくがいま、このぼくにひどい悪態を吐いたこの紳士に、ひどい悪態を吐きかけられたという証人になってくれ。ぼくは喧嘩ずきな男じゃないが、喧嘩を売りたいというなら、いつでも相手になってやる。それに、セーターに布帽子のうす汚ない出しやばり屋に悪態をつかれて、黙って引っこんではいられないぞ」

こういう威勢のいい言葉とともに、ウィリアム・マリナーはカウンターのそばにびおり、相手の喉をつかんで、がぶりと相手の右耳に喰いついた。ちょっと混乱の間があった。その間に、誰かがウィリアムのチョッキの衿とウィリアムのズボンの尻をつかむ。すつと早い動きのあと、ふわっと冷たい風を感じる。

気がついてみると、ウィリアムは酒場の前の歩道に坐り

こんでいるのだった。スイング・ドアから手が一本出て、彼の帽子をほうりだす。そこでウィリアムは、夜の戸外にただ一人、黙想をお相手ということになった。

こ想像のとおり、これはひどくつれない自然というもの。悲しみと幻滅が、ウィリアム・マリナーを肉体的苦痛のように責めさいなむのだった。店のなかにいる友だちが、せっかく彼がやさしく陽気につきあって、しかも彼は何一つしないのに、彼を固い歩道にほうり出したということが、何よりも悲しかったし、しばらくは彼はそこに坐りこんだまま、声もなくむせび泣いていた。

やがて彼は、どうやら立ち上ると、片っ方の足を恐ろしい慎重さで、こわごわもう一方の足の前に出し、こんどは反対の足をもち上げて、同じような恐ろしい慎重さで、こわごわその足の前に出す。彼はホテルへ帰ろうと歩きはじめたのだった。

角で足を止める。右手に何だか手すりのようなものがあった。彼はそいつにしがみついて、しばらくは一休み。

ウィリアム・マリナーのしがみついた手すりは、茶褐色岩作りの建物にくっついているものだった。そもそもか